（ 続紙 1 ）

京都大学	博士（　人間・環境学　）	氏名	佐野 泰之
論文題目	モーリス・メルロ＝ポンティの言語哲学――「客観的思考よりさらに根本的な理解と反省」をめぐって――		

（論文内容の要旨）

本論文は二部に分かれ、各三章計六章よりなる。それぞれについてその要旨を説明する。

第一部では中心的議論が展開される第二部のための予備的な議論が展開される。メルロ＝ポンティの早い時期の著作『行動の構造』(1942)、『知覚の現象学』(1945)が議論の中心である。

第一部第一章では、『行動の構造』が扱われる。明確に現象学の立場をとる以前のこの著作は、ゲシュタルト心理学の「ゲシュタルト」概念を、ゲシュタルト心理学者以上に先鋭化させることで、部分に還元できない全体としての構造の環境との関係として、物理的、生物的、人間的秩序それぞれを理解しようとする。それぞれの秩序は固有の構造のあり方をもつという。本章で申請者はこの三秩序について明らかにした上で、とりわけ上下の秩序間の「統合」の関係に注目する。心身の関係もこの秩序間の統合という概念で理解されるが、申請者はこの秩序間の「統合」のメカニズムが、言語論にも適用できるものと指摘する。

第一部第二章は『知覚の現象学』において類似のメカニズムを取り出そうとするものである。メルロ＝ポンティが明確に現象学的姿勢をとるようになった『知覚の現象学』は、彼のいう「主知主義」と「経験論」という二方面の「敵」との戦いの中で展開されるが、その大筋を紹介したあとで、申請者は実存による状況への居住と居住された状況からの脱出のメカニズムに焦点を当てる。居住と脱出は身体的な世界内存在のあり方と不可分であり、さらにはそれが時間の弁証法的構造と不可分であることが確認される。このような時間の弁証法はほかにもさまざまな根源的なパラドクスを解決するものだという指摘がなされる。

第一部第三章では、時間の平板化という時間の変性が実存の各種障害の根源にあると見てとられる。それに対し、健常者において実存の生き生きした運動を可能にし、居住や脱出を可能にするのは脱自としての未来である。

さらに本章では、「根本的反省」という概念が究明される。メルロ＝ポンティは主知主義的な反省と異なり、自己から距離をとらず、行為のただ中で自己をとらえることのできるような反省――本論文副題にもなっている「客観的思考よりさらに根本的な理解と反省」――を構想しており、それは「根本的反省」とも呼ばれる。こういう反省が可能なのは、言語が次のような諸機能をもつからである。つまり、ことばはことば自体と切り離せない意味をもち、ことがらを発見する創造的役割を果たし、ことばの特殊性を失わないまま普遍的なものを担いうるからである。ただしこういう反省も、言語以前の自己（「沈黙のコギト」）をそのまま取り出せるようなものではないと申請者はメルロ

＝ポンティに批判をむける。

第二部はメルロ＝ポンティが1952-53年度に行った講義の記録『言語の文学的用法の研究』の解明にあてられる。まず第二部第一章では、この講義の背景をなすメルロ＝ポンティの言語論を概観する。サルトルを批判的にふまえてメルロ＝ポンティは、コミュニケーションを志向する文学者の参加（アンガージュマン）は、理解されない離脱（デガジュマン）の契機を含まざるを得ないという。

第二部第二章は上記講義のヴァレリー論の解明である。メルロ＝ポンティによればヴァレリーは「世界を生まれつつある状態でとらえようとした」とされるが、この「世界」には自己も含まれるから、上述の「根本的反省」と重なる面をもつと言えよう。ヴァレリーは長い創作中断の時期を経て、意図的知性的構築はむしろ世界の表現としての創作を妨げるのであり、言語の自ずからの展開にゆだねることも必要だと悟る。反省は生を対象化せず、むしろ生がおのずから展開し表出するがままにゆだねるべきなのである。ここで見られる葛藤の克服は、先の秩序間の「統合」のメカニズムと重なるという重要な指摘がなされる。

最終章となる第二部第三章では、上述講義のスタンダール論が対象となる。スタンダールの人生と文学の分析に基づき、彼の葛藤とその克服に実存の脱自構造を見てとる。スタンダールが葛藤の末到達した文学的誠実さとは、記述される対象を反省・記述による歪曲なしにそのまま描くことではなく、新たな対象の創造だと述べられる。直接の描写でなく間接的に描き出すことも必要な手法である。しかしこの手法で読者に理解させることは容易でない。そのためコミュニケーションの失敗としての離脱（デガジュマン）を招く危険をはらむ。しかしながら文学的誠実はこの困難を克服するために、自らにふさわしい読者もまた創造するのである。こうして文学と哲学の方法である反省は、単なる「観照」のようなものではなく、人生や人間関係の葛藤を克服する実存の実践だと結論される。

（続紙　２　）

（論文審査の結果の要旨）

本論文『モーリス・メルロ＝ポンティの言語哲学――「客観的思考よりさらに根本的な理解と反省」をめぐって――』は、メルロ＝ポンティの言語論を分析したものである。

本論第一部では、『行動の構造』（1942）、『知覚の現象学』（1945）を読解し、副題にもなっている「客観的思考よりさらに根本的な理解と反省」という概念をとりだす。これは「根本的反省」ともよばれるが、自己から距離をとらず行為のただ中で自己をとらえることのできるような反省であり、こういう反省をメルロ＝ポンティがめざしていたと申請者は主張する。第二部ではこの「根本的反省」概念にもとづいて、1952-53年度の講義録『言語の文学的用法についての研究』が分析される。そしてこの概念が後の時期の言語論にも通底する分析の方法となっていることが示される。申請者は、『行動の構造』でのメルロ＝ポンティの構造のダイナミズムへの注目は、『知覚の現象学』での実存概念等の導入による改変を経て、さらに後の時期の言語論にも一貫した形で存続しているという。申請者のこの見解は独創的である。そういう見解にもとづいて一貫した筋を描いている構成力、思考力は十分評価できる。

本論文の中心は第二部にあり、そこで論議の中心となる『言語の文学的用法についての研究』は、2013年に公表された新しい文献である。そのため、この文献についての先行研究もわずかであり、この文献についてのこれだけ詳細な研究は初めてであろう。その意味で、本論文には高い新奇性、独創性が認められる。

本論文は上記の「根本的反省」を掘り下げ、第二部での分析を経て最終的に「根本的反省」が一種の実践の試みであるという結論にいたる。スタンダールが葛藤の末到達した文学的誠実さとは、記述される対象を反省・記述による歪曲なしにそのまま描くことではなく、むしろ新たな対象の創造だと述べられる。そして文学的誠実はそれにふさわしい読者もまた創造する必要があると指摘し、こうして文学と哲学の方法である反省は、単なる理論的「観照」のようなものではなく、人生と人間関係の矛盾を克服する実存の実践だという結論に至る。この見解は独創的で興味深いものである。

本論文の分析姿勢でとりわけ評価すべき点は、以前から公開されている著作については、一次文献、二次文献の分析で満足せず、当時メルロ＝ポンティが依拠した文献までさかのぼってメルロ＝ポンティの議論の真意と当否を確認しようとしていることである。現在の先入観にもとづくのでなく、歴史的文脈におき戻して評価するこのような研究は、文献研究としてはある意味当然の姿勢とも言えるかもしれないが、まだ歴史が新しいメルロ＝ポンティ研究においては、十分に行われてきたとは言えないものである。

ただ、不満な点もないわけではない。たとえば「統合」という全体を貫く中心概念の意味がいささか不明瞭なまま拡張適用されているように見える。また、時間性と反省の関係は、第一部と第二部をつなぐ鍵であるにもかかわらず、あまり明瞭でない。

さらに、第二部の分析対象である文学者たちが編み出した「錯綜体」、「即興」というような方法的概念について――文学者自身が明確に規定していなかった曖昧な概念であるから解明が困難だということは考慮するとしても――、もう少し明確化できなかったのかと残念に感じる。

しかしながらこのような点を差し引くとしても、上記のように、対象の新奇性、議論の独創性、文献に対する透徹した分析など、本論文は高い研究水準に達していることはまちがいない。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成３０年１月１６日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第１４条第２項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日：　　年　　月　　日以降